

乾燥前処理としての葉枯らし法の検討(3)

－ スギの葉枯らし効果 －

見尾貞治・河崎弥生・金田利之・小玉義泰

1. はじめに

前年度は、林地でスギ材の葉枯らし処理を行った。その結果、生材含水率が高い個体（平均含水率 171.9%）では、葉枯らしによる水分低減の効果が小さい（含水率の平均低下量は30%）ことが知られた。

そこで今回は、比較的風通しの良い平地林において、葉枯らし効果の実証を試みた。併せて、スギ品種（クローン）間の比較も行った。

2. 方法

1) 供試木

勝田郡勝央町植月中、岡山県林業試験場内のスギ見本園からおよそ30年生のスギを間伐して供試した。サンプスギ、クマスギ、ヤブクグリ、アヤスギおよびガモウメアサの5品種から、それぞれ2～3本ずつ、合計13本を供試した。なお、それぞれの品種の平均樹高（H）および平均胸高直径（DBH）を第1表に示す。

第1表 供試木のサイズおよび処理法

供試スギ材の 品種名	供試木のサイズ		処理法		
	樹高 ^{*1} (m)	胸高直径 ^{*1} (cm)	葉枯らし	葉なし丸太	生材
サンプスギ	16.7	20.7	○	○	○
クマスギ	16.0	18.9	○	○	○
ヤブクグリ	15.1	21.5	○	○	○
アヤスギ	15.7	22.2	○	○	×
ガモウメアサ	13.9	19.5	○	○	×

*1 それぞれの品種の平均値を表す

2) 方法

①処理

供試木は1988年12月に伐採した。伐採は地際から行い、生材試料は伐採後直ちに円盤を切り出して含水率の測定に供した。

生材以外の試料は、個体ごとに以下の葉枯らしまたは葉無し丸太処理を行い、翌年6月までの約6ヶ月間現地に存置した（第1表）。

葉枯らし試験木は梢端部から樹高の1/3程度までの枝葉を残した。

葉無し丸太は、枝葉を全部取り払い、地際から3mごとに玉切りして、丸太の状態で作置した。

②水分測定

処理後、地上高0.3mから梢端部に向かって1m間隔で、厚さ5cmの円盤を切り出し、全乾法で含水率を求めた。

3. 結果と考察

結果は第1～3図に、各処理ごとにまとめて示す。

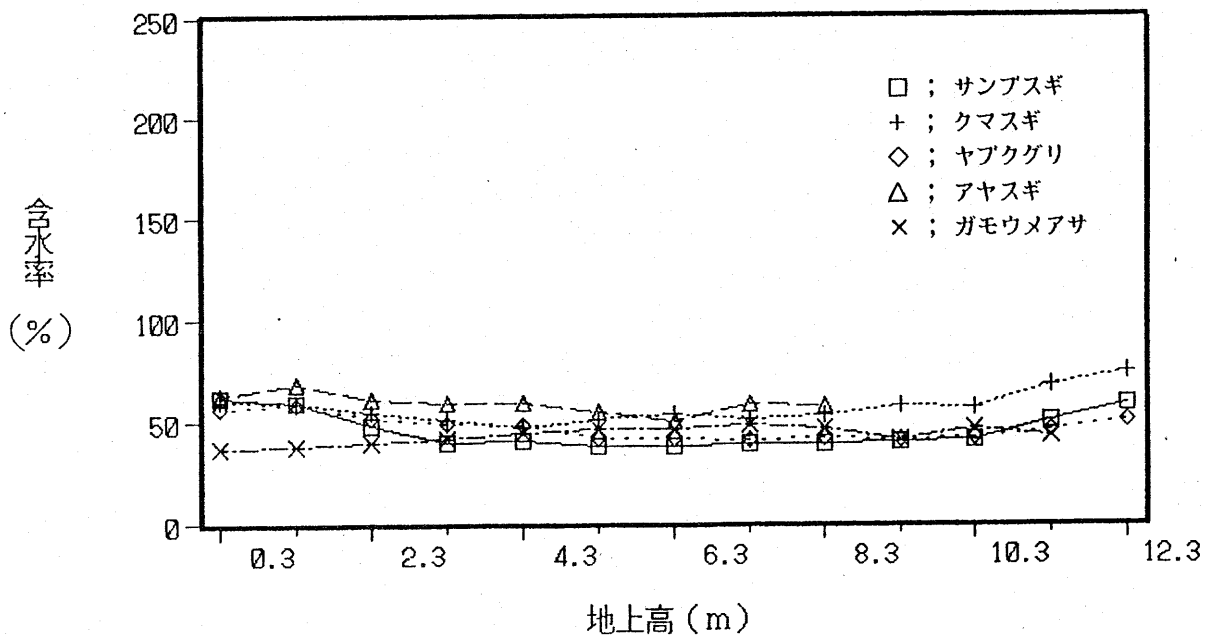
葉無し丸太（第2図）および生材（第3図）と比較して、葉枯らし材（第1図）では、

①樹幹内での含水率のバラツキが小さい

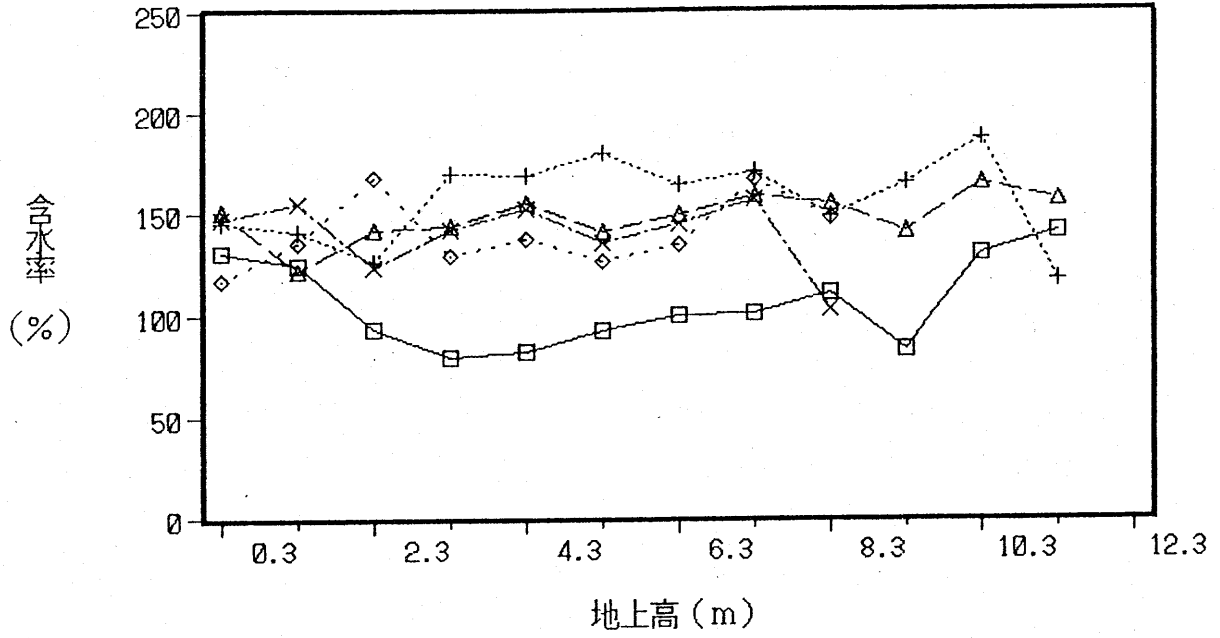
②個体間における含水率の差が少なくなる

ことが認められる。これらのデータは、スギ材の場合でも水分の低減において、明らかに葉枯らし効果が期待できることを示唆する。

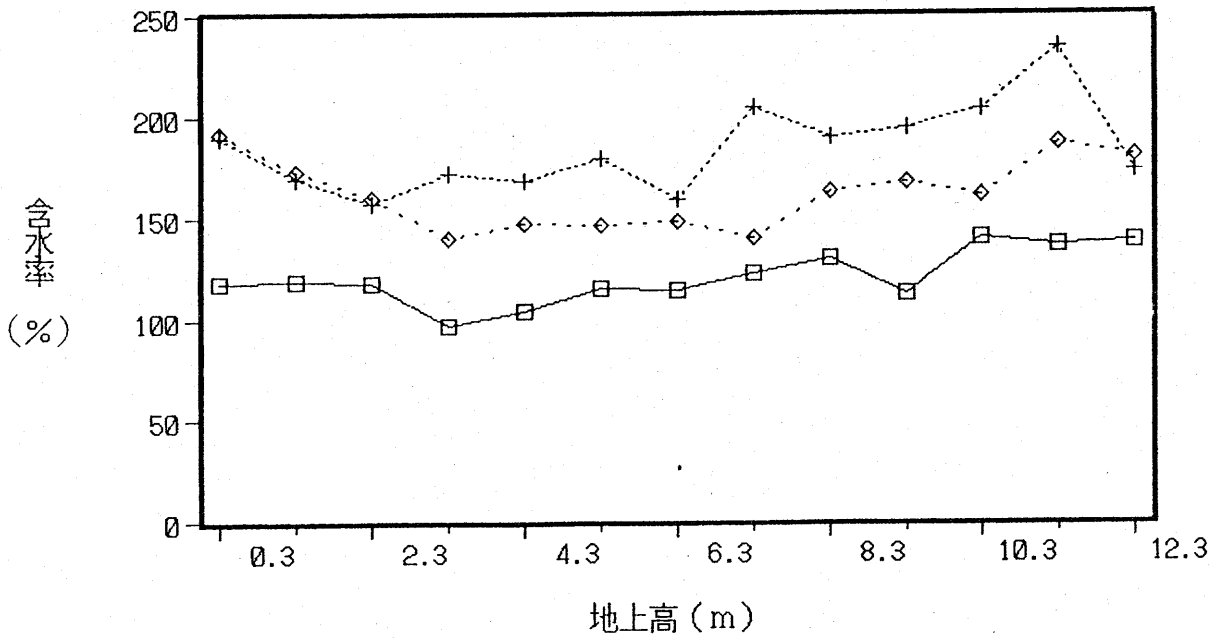
以上の結果、適切な条件下で行えば、水分の低減だけを目的とする人工乾燥前処理として、葉枯らしはスギ材においても十分に意義ある処理と思われる。



第1図 葉枯らし処理材の含水率



第2図 葉無し丸太の含水率



第3図 生材の含水率